

パーソナリティのダイナミズム

—達成動機づけの視点から

Dynamism of personality through the viewpoint of achievement motivation

宮本 美沙子

日本女子大学名誉教授・前学長

筆者は達成動機づけを、個人の特性と社会の状況・文脈・文化との「関係」によりとらえている。すなわち、キーワードは「関係性」と言うことであるが、人との関係に限らず、物との関係、事柄との関係なども含む。社会的な状況・文脈・文化の中には、知的な課題、情緒的な課題など、様々な状況・文脈・文化がある。その中で、個人は自己の特性と社会との相互作用、因果関係などに直面し、今、自分はどのような立場におかれているかというメタ認知を働かせ、自己のパーソナリティを形成している。

本シンポジウムでは、達成動機づけの「関係性」を理解する手がかりとして、「イメージの働き」「可能性の認識」「価値の多様性」などの視点から説明する。

達成動機づけにおける「イメージの働き」

達成動機の測定法を考え出した McClelland, Atkinson, Clark & Lowell (1953) は、達成動機の強さをみるのに「イメージ」を活用した。人が何かをしている絵を見せて、その絵を手がかりに自由に物語を作らせ、その物語の中に投影された「やる気」の内容により、達成動機の強さを測定した。

被験者には、刺激として与えられた絵をただ説明させるのではなく、「その絵のような状態になる前にはどんなことがあったと思うか」「そのような状態ではどんな気持ちになっているか」「その後はどのように物語が展開するか」などを、できる

だけ生き生きと表現してもらうように指示する。被験者が描いたその「イメージ」に対して、達成動機に関連した内容があれば、それが達成動機の得点となる。

得点化にあたり、McClelland ほかは、成功への願望と失敗回避について持つ不安との相対的な「関係」を重視した。また、何かがうまくいくことばかりではなく、このようにしたら失敗してしまったなど、否定的な状況や結果に対しても、それが目標達成に関連している時には得点を与えた。つまり、成功と失敗とは表裏一体の「関係」にあるのであり、成功する内容ばかりでなく失敗の状況や結果を認識している時にも得点化される。positive な面と negative な面との「関係」を理解することにより、その場の状況の見通しが立ち、行動を始発しやすくなるからなのである。

ところで以前、アメリカの大学生の資料で、達成動機の得点と親和動機の得点とは負の相関を示している研究があった。筆者は、日本の児童や青年では両者は負の関係にはならないだろうと思った。そこで、アメリカの資料と同じ「イメージ」を分析する手法により、日本の児童・生徒・大学生の達成動機と親和動機の内容を比較してみた。その結果、日本の児童・生徒では両者は有意な正の相関を得、大学生では無相関だった。児童や生徒では「進学の情報を得るために、親や教師に相談した」とか「スポーツの選手になりたいのでコーチに指導してもらった」など、まわりの援助者と親和的な「関係」を保ちながら目標を達成す

る「イメージ」を描き、「親和的達成動機」を持っている者が多かった。

1989年にフィンランドで開かれた国際行動発達学会（ISSBD）のシンポジウムにおいて、筆者は日本の児童や生徒には「親和的達成動機」がみられることを報告した（宮本，1989）。その時に中国の研究者も、達成動機に社会的志向と個人的志向の両方が存在すると言い、アメリカの研究者は、西欧社会では達成動機の個人的な側面のみが強調され、社会的な「関係」など多面的な視点の欠落していることを反省していた。社会的な状況における様々な「関係」により動機づけも多面的な様相を示すのである。

われわれは、「イメージ」を持つことにより、生活に潤いをもたらす、豊かな動機づけを持つことができる。

達成動機づけにおける「可能性の認識」

もしも人から自分のとらえる自己概念を尋ねられると、ふつうわれわれは、「ぼくはスポーツが得意だ」といった具合に、今の自分の人格特性を考える。ところで自分をとらえる時に、今の自己は重要であるが、過去の自己、そして、将来の自己に思いを馳せることも、まさに自己概念の重要な側面であることは間違いない。

アメリカのMarkus & Nurius（1986）は、今の自己も大切であるが、もっと将来の「可能自己（possible selves）」を考えようと言っている。

Markus（1977）は、自己をどのようにとらえるかという「セルフ・スキーマ」の持ち方により、将来の自己についての決断、推論、予期などに違いが生じ、「セルフ・スキーマ」に適合する方向で情報処理がなされると考えた。そして、個人の「セルフ・スキーマ」を理解するためには、その個人がとらえる現在や過去の自己概念を知るだけでなく、将来に対する自己の表象をとらえることが必要だとしている。

そこでMarkus & Nurius（1986）は、自己概念

を調べるに際し、現在の自己概念を問うと共に、同じ項目について「将来そのような自己になりたいか」「そのようになれる可能性はあるか」「そうなることは自分にとって重要であるか」という角度からも問い、将来の「可能自己」につき調べた。

宮本・中田・堀野（1994）は、達成関連動機とMarkus & Nurius（1986）の「可能自己」の項目との関係を大学生と高齢者を対象に調べた。大学生も高齢者も、現在の自己像につき、自分がコンピテンスや意欲があると思っている者は肯定的な「可能自己」を持っていた。また高齢者にとっては、家族との社会的な結び付きがうまくいっていると思っている者は、肯定的な「可能自己」を持っていた。社会的な結び付きがうまくいくことにより未来につきpositiveに考えられることは、容易に推察できる。社会的な「関係」の重要性をここでも指摘できる。

達成動機づけにおける「価値の多様性」

われわれは、「自分の持味」を自由に発揮できる「社会」の中では、安心して目標の達成に専念できる。「自分の持味」と周りの「社会」との「関係」が重要である。

寺田寅彦の随筆「科学者とあたま」の中で、寅彦は、「いわゆる頭のいい人は、言わば足の早い旅人のようなものである。人より先に人のまだ行かない所へ行き着くこともできる代わりに、途中の道ばたあるいはちょっとしたわき道にある肝心のものを見落とす恐れがある。頭の悪い人、足ののろい人がずっとあとからおくれて来てわけもなくその大事な宝物を捨てて行く場合がある。」と言っている。

各自が自分にあったテンポややり方で行動ができれば、その時には心にゆとりができ、周りの大事な宝物が見えてくるのだと思う。それにより安心して目標の達成にも励むことが可能になるに違いない。

それぞれの人には、それぞれの成長のテンポや

スタイルがある。われわれは、相手のそのテンポを「待つ」心の広さを持たなければならない。それに関連して、Taft (1933) の述べる「セラピーの語源」からは教えられるものがある。Taft は、‘therapy’ という英語には動詞形がなく、このことから相手に対して何かをすることではないことがわかると言う。セラピーの語源は、ギリシャ語の名詞では「召使い」、動詞では「待つ」を意味するのだという。クライアントとセラピストの本当の「関係」はどういうものであるかにつき、筆者はこの書から学んだ。

他者や社会との「関係」の中で、相手に対しても自己に対しても、それぞれの「可能性を信じ」「価値の多様性」を受け入れることにより、豊かなパーソナリティを育てることができ、達成動機の育成にも資すると言える。

(シンポジウム当日は、幾つかのエピソードを話して説明したが、本稿では誌面の都合で割愛する。宮本編, 1993; 宮本, 1995 を参照されたい。)

引用・参考文献

- Markus, H. 1977 Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35** (2), 63-78.
- Markus, H., & Nurius, P. 1986 Possible selves. *American Psychologist*, **41** (9), 954-969.
- McClelland, D. C., Atkinson, J. W., Clark, R. A., & Lowell, E. L. 1953 *The achievement motive*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- 宮本美沙子 1989 達成動機概念をめぐって CODER News Letter, **13**, 2-5.
- 宮本美沙子 (編) 1993 ゆとりある「やる気」を育てる 大日本図書
- 宮本美沙子 1995 関係考 人間性心理学研究, **13** (2), 168-172.
- 宮本美沙子, 中田美子, 堀野 緑 1994 大学生と高齢者における可能自己と達成関連動機との関係について 発達心理学研究, **5** (1), 22-30.
- Taft, J. 1933 *The dynamics of therapy in a controlled relationship*. New York: Macmillan.
- 寺田寅彦 1933 小宮豊隆 (編) 1948 寺田寅彦随筆集 第4巻 岩波書店 Pp.202-207.